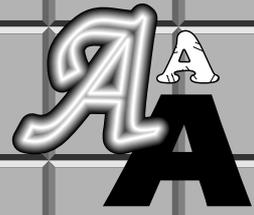


季刊 Ja-Net

ジャネット



第10号

Ja-NetはJapanese Networkの略です。
「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ
情報誌にしたいと考えています。

スリーエーネットワーク

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル
TEL 03-3292-6410/FAX 03-3292-6197
E-mail 3ac@mail.at-m.or.jp

日本語へのふたつの思い

東京女子大学 教授 西原鈴子



巻頭寄稿

日本語を外国語として教える立場に立つとき、また日本語を他の言語と比較しながら論じようとするとき、私はいつも相反する二つの思いに捉えられる。一つは、日本語によるコミュニケーションは変っていくべきだ、日本や日本人が世界に伍して力を発揮していくためには、もっと直截的に自己主張できることばを持たなければならないという思いである。しかし同時に、日本語表現の持つぎりぎりまで研ぎ澄まされた美しさが限りなくいとしく思われ、この美しさを失ってまでも日本語を変えて行く必要はないとも、強く思うのである。そのことに関して、幾つかの説を引いて考えてみたい。

「高文脈」型の日本語

エドワード・ホールは、世界の諸言語によるコミュニケーションの型を「高文脈」型から「低文脈」型に分類している。「高文脈」型のコミュニケーションとは、実際にことばにする内容よりもことばにはされずに理解される内容のほうが豊かな伝達方式である。ホールの分類では、その極に日本語が据えられている。一方「低文脈」型のコミュニケーションでは、ことばになったことのみが情報としての意味を持ち、ことばにならないことは伝わらないとされる。そちらの極にはドイツ語

が据えられている。この分類について、心外だと思う人も多くいるかもしれない。しかし、ホールのように幾つもの文化について典型的に考えている人の目には、日本語の意思疎通の型が相対的に「高文脈」型に映るのであろう。たしかに私達は、日本語を使って意思の疎通を図ろうとすると、お互いに分かり合っていると感じられることをわざわざ口に出して言ったりはしないという傾向がある。読者諸氏は、夫婦や恋人同士あるいは親子の間で、お互いに愛し合っていることを毎日確かめ合っておられるだろうか。筆者が推察するに、よほどホットな関係でないかぎり、そのようなことはないように思われる。また、「空気と水」の関係をよしとする雰囲気があり、親しいもの同士がことばを交わさずに一緒にいることをあまり苦にしないのも、事実ではないだろうか。それらはみな、「高文脈」型の特徴とされていることである。一方、「低文脈」型の言語では、口に出さないことは思っていないことと同一視されてしまうから、人々は必死になってことばによるコミュニケーションを維持しようとすることになる。

国際社会のコミュニケーション・パターン

このような日本語のコミュニケーション・パターンは、日本語社会の中では軋轢の原因

にはならない。もし仲間うちに「低文脈」型の人が出たら、理屈っぽいと煙たがられるのがオチである。しかし、グローバル化する世界で、自分の存在をアピールしていくためには、言わなくても分ってもらえるということは期待できない。主張すべきことははっきり主張しないと損をすることが多々あるだろう。米国の大学で研究生活を送っている若手研究者が、研究の成果を共同発表することを持ちかけられ、業績を横取りされそうになったとき、「自分の業績であることはみんな知っているから、まさかそんなことにはなるまい」と思い、それでも不愉快な顔をすることで意思表示をしたつもりでいたら、同意したと誤解されて数年間の研究成果を失ったという話を最近聞いた。同情すべき話ではあるが、私達はこれを卑劣なやり方でだまされた話と考えてはいけないのである。世界の舞台で仕事をするときに、「黙っていてもみんな分ってくれる」ことを期待する日本語の「高文脈」型をそのまま当てはめようとするのは、決して奥ゆかしいのではなく、「日本語のアタマ」のまま世界をのし歩く無知な言動ということにはほかならない。最先端の世界では当該の文化のレトリックで話を進めないと勝負にならないのである。

日本語表現に関する類型化のもう一つの例として、ロバート・カプランによる各国語の修辞パターンがある。カプランは米国の大学で各国から渡米した留学生に作文指導をしていて、彼等の書く英語がそれぞれの第一言語の影響を強く反映した特徴を持っていることに気がついた。図示された修辞パターン（下図参照）によると、日本語を含む「オリエンタル」言語は、論旨が渦巻き状に堂々巡りした挙句、結論がはっきり示されないという烙印を押されてしまっている。これも非常に心外なことであるが、どうしてそうになってしまうのだろうか。

結論を最初に提示する英語

日本語の談話（話し言葉・書き言葉双方）は、文章の主題の提示が遅くあらわれるという特徴を持っている。依頼・勧誘などを目的とする日常の談話でも、あたりさわりのない話をしてから、あるいは話にのってきそうな

雰囲気かどうか探りを入れてから、「実は…」と本題を切り出すのがもっともよくあるパターンであろう。書き言葉でも、「起承転結」の「起」の部分では本題は通常示されない。また、ジョン・ハインズなどが「帰納的」談話構成と名づけている、これこれしかじかという状況説明から始まって最後に結論に至る日本語の表現構造では、冒頭の部分で話し手（書き手）の一番言いたいことが示されることはあまりない。しかし英語などでは「演繹的」表現構造が論旨明解な文章構造の規範とされ、先ず結論を提示してから「なぜならば…」と結論に至った理由をのべるという順序が奨励されるレトリックになっている。このことは、日本語の話者が英語などで交渉したり文章を書いたりするときには、先に「ずばり本題」を述べてから状況説明をするという、通常の日本語表現とは異なったレトリックに意図的に切りかえる必要があるということの意味する。

伝えたいことをすべて口に出して表現し、言いたいことを真っ先に言うというのは、日本語話者が外国に行ったときにだけ必要になるのではない。現在日本国内に滞在している外国籍の人々とのコミュニケーションにおいても、同じ切り替えが必要なのである。言語文化的背景を共有しない人々との意思疎通においては、黙っていて察してもらうことを要求することはできない。慣れ親しんだものの言い方を変えて、より明示的コミュニケーションを心がける心配りがあってこそ、日本社会は多文化共生社会に発展するのではないだろうか。その意味でも、日本語は変っていく必要があると筆者は考えるのである。

しかし、伝統的な日本語表現のパターンがなくなってしまってよいわけではない。ことばに出さなくても分かり合える心地よさ、ことばの掛け合いにおける「あうん」の呼吸の妙味、俳句に代表されるような少ないことばで多くを表現する形式の存在などは、日本語社会が大切に育んできた特徴であり、それを変えなければならないことは自文化のアイデンティティを失うことでもある。冒頭に述べた、日本語への矛盾するふたつの思いとも叶えられる良い方法はないものだろうか。

「カプランの図」

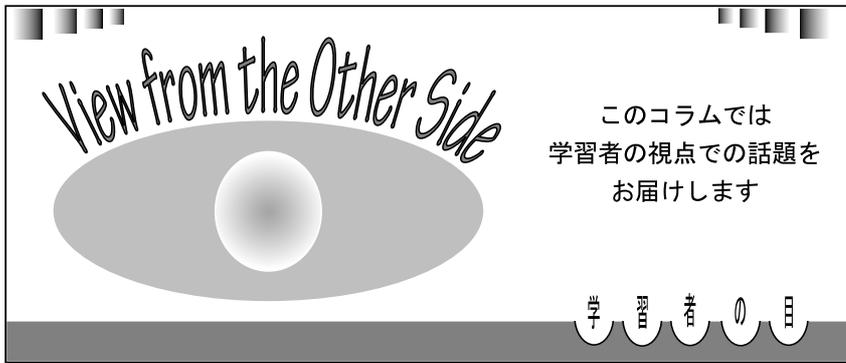
English

Semitic

Oriental

Romance

Russian



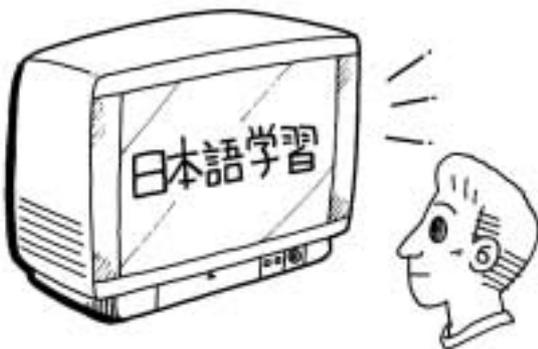
日本語学習の味方 テレビ

日本語学習者の一番手軽な勉強の道具は、普通の家にある物です。それはテレビです。聞き取りの練習が必要ですか？ それならテレビを見てください。私はテレビを見る時、ノートと鉛筆を用意して知らない言葉があればCMの間に意味を確認します。ちょっと面倒くさいけど新しい言葉を覚えるためにいい方法です。もちろん、どんな番組がいいかちゃんと考えた方がいいです。

実は外国人にとって、日本のテレビはそんなに面白くないです。日本のテレビはクイズ番組あるいは料理の番組ばかりです。

私は初めてクイズ番組を見た時とても驚きました。勝った人が商品をもたらったのです！「彼は有名でお金持ちなのに商品をもたらった？ ケチだ！」と思いました。イギリスでは、こういう場合には救済事業に寄付するのが一般的です。それに、司会の人はどうしてあんなに騒がしいのか、と思います。

料理の番組については、日本人は料理が大好きなのは知っていますが、他の人がおいしいものを食べているのを見てどうして面白いのか全然分かりません。イギリスの料理を食べたことがある日本人の友人は、私に、「イギリスの食べ物はまずいし、君はイギリス人なので、食べ物についておいしいという言葉あまり使わないだろう。もともと食べることの楽しさを知らないんだ」と言っています。



さて、聞き取りの練習についてですが、初級の人なら子供向けの番組がいいと思います。小さい子供の話し方は文法的に簡単で聞き取りやすいからです。もちろん、大人にとって子供番組は基本的に子供っぽいと思うかもしれませんが。

私が推薦したいのは「火曜サスペンス劇場」というドラマです。この番組は視力障害者の為に副音声で状況を説明しています。映像とナレーターの説明で意味が分かります。サスペンスに興味が無い人は、他の副音声の説明付きの番組を探して下さい。

私は「渡る世間は鬼ばかり」というドラマをよく見ます。日本語の能力が少し足りなくても、毎週見ているうちに俳優の性格や話し方に慣れてきて、話がだんだん分かるようになってきました。やはり継続して見ることは重要です。それに、この番組のストーリーは基本的に毎週同じなので理解しやすいのです。

ドラマの中で、結婚した娘は、彼女の義理の母親（夫の母）との関係をととても気にしている様です。義理の母親はいつも、嫁である彼女にあれこれと言っています。しかし、欧米の伝統的な考え方では夫婦の一番大きな問題は婿と義理の父親（妻の父）との関係です。

こういうドラマを見れば、日本語だけでなく、日本人の習慣あるいは考え方も勉強できます。

1時間のドラマは時間が長くて集中しにくい人には、NHKの朝の連続テレビ小説がいいと思います。毎日15分間の放送ですから少しずつ勉強出来ます。時々、外国人には分かりにくい部分もありますが、伝統的な日本の生活を知ることが出来ます。

他に日本語学習に役立つテレビ番組があれば、私に教えて下さい！

(N・ジェームス/Ja-Net 編集員)

鹿児島県 鹿児島市

日本語教育の隙間を埋めるために

異文化教育研修所有隣館 上迫和海

異文化教育研修所有隣館は、1992年の9月に開設され、現在7年目に入っている。

外国人のための日本語教室

外国人のための日本語教室として、常設クラス、特別クラス、集中コース、受託コースがある。常設クラスは週に1~3回で、入門から上級までレベルに分かれている。特定の目的・対象で開くのが特別クラスで、「運転免許取得のためのクラス」などが特に興味深く意味深かった。児童・生徒を対象にした授業もある。集中コースは1カ月を単位に春期と夏期および要望があった際におこない、ホームステイとの組み合わせもしている。受託コースは国際研修協力機構や民間国際交流団体、企業などからの依頼で実施してきた。

学習者は語学指導助手、会社員、配偶者などが主である。



受講生と筆者(中央)

ポーランド、ポルトガル、モロッコ、エジプト、コートジボアールなど、九州の南端にある鹿児島でさえこんなにも国際化が進んでいるのかと驚くことが多い。いろいろ合わせて、これまで150名程を迎え入れた。

日本人のための講座

日本人の教師志望者向けには、教えるための講座と日本語教育能力検定試験受験講座を実施してきた。修了者の中から、日本語学校や国内外教育機関への就職者、青年海外協力隊員などが出てきている。中国帰国者の日本語教室や大学での留学生向け補講、ボランティアグループでの教師も多くなってきた。有隣館での日本語教室を運営していくための教師を自ら養成している面もある。

一般に向けては、「日本人のための日本語講座」を6シリーズ実施した。言語学、音声学、方言、敬語、文章表現などの内容を、大学の先生方を中心にテレビ局や新聞社の方などにもお話しいただいた。日本人のための日本語学習のシラバスをぜひ作っていききたい。



各国料理を持ち寄る忘年会

有隣館の目指すもの

その他に、外国人と日本人いっしょの習字教室や花見の宴、各国料理持ち寄り忘年会などもしている。鹿児島に住む外国人に、よりよい日本語と精神的な安定とを少しでも提供したいというのがその願いである。

ところで実は、この有隣館を維持していくのはなかなかの難事なのである。大学や公的機関のように大きな組織ではない。経済の論理には反している。たとえば、1クラスの人数が多ければ多いほど経済効率は上がるが、レベルや目的を重要視すればクラスは細分化される。一方、ボランティアグループの教室と比較する外国人からは、授業料が高いと言われる。

しかし社会的に考えて、こういう機関の存在意義はまちがいない。留学生でも就学生でも研修生でもない外国人が日本語を勉強したいと思ったとする。研究生になって大学での教育を受けるためには、運や環境や条件に恵まれる必要がある。就学生を主な対象とする日本語学校に入ると、多くの場合、試験勉強に明け暮れ会話の習熟のためには無駄な時間と労力を使うはめになる。少々のお金を払ってでも、密度の濃い、高度な知識の、目的に適った日本語の授業を受けたいと思う人は確かにいる。また、時間的な制約が大きくて学習の機会が得にくい人にとっては、細かく対応してもらえる機関は貴重である。

有隣館の今後について、NPOを目指したらどうかと、資本主義の原理の前には理想論に過ぎないんだ(自暴自棄?)とか、パトロンは探せないだろうかとか、泣き言を言っても仕方がないだろうかあれこれ考える。よい授業、これは絶対必要条件だと思うのだが、十分条件について皆様のお知恵をお借りできれば幸いである。

多様化する日本語学習者のために

ロンドン大学ランゲージ・センターの「日本語」展開

英国

ロンドン

SOAS ランゲージ・センター 日本語コース
コーディネーター ブリジッド・ブローディ

ロンドン大学SOASランゲージ・センター

School of Oriental and African Studies、略称SOAS(東洋・アフリカ研究所)はロンドン大学のカレッジとして1916年に創立されました。創立当時は東洋研究所でしたが、1942年になってアフリカ諸国の研究も加わり、東洋・アフリカ研究所と改名されました。以来、欧州における、アジアとアフリカ諸国の言語、文化、社会、歴史、政治などの研究の中心的存在として名を馳せてきました。80もの国からの学生や研究員が集まっているSOASでは、現在学部生と大学院生を合わせ、3,000余りの学生が学問に取り組んでいます。

そのSOASの中に大学外部の団体や個人に言語教育のみを提供している部門があり、それが私の勤めているランゲージ・センターです。英国外務省その他の政府機関、シティーの金融会社などから来る学生を中心に、その他多数の個人にコースを提供しており、いわゆる成人学級の役割を果たしています。ランゲージ・センターでは、日本語、中国語、アラビア語を中心に、SOASで扱っているアジアとアフリカの数十言語のすべてが学習できます。

優秀な教師の確保とともに、ランゲージ・センターでは最新機器を揃えることも心がけています。現在、17カ国のテレビ放送が見られるサテライト・テレビその他、テープ、ビデオ、コンピューターが使える「リソース・ルーム」があり、学生が自由に利用できるようになっています。

ランゲージ・センターの「日本語」コースと教師養成

ランゲージ・センター日本語部門は、フルタイム・コース、パートタイム・コース、教師養成講座の3本立てになっています。

フルタイム・コースは、1年間で初級から中級終わりまで(漢字にして1,000字)達する集中講座で、試験を合格した学生には、ロンドン大学からディプロマの資格が授与されます。英国の大学と同じ3学期制になっており、月曜日から金曜日まで1日3時間週15時間のクラスワークの他、宿題も大量に出される厳しいコースです。大学の学位を持っている者のみが入学できるようにになっています。

ランゲージ・センターではパートタイムの夜間コースが学生数がかつても多く、日本語も十数種類の夜間コースをはしらせています。週2回の、フルタイム同様ディプロマにつながるコースと、週1回のみ資格の授与のないコースの両方があり、それぞれのコースが年3回はしています。そのほかにも、日本語能力試験準備コースや夏期集中講座といった、年1回の特別講座も開かれています。レベルは、これまでは能力試験一級相当までのレベルのクラスしかありませんでしたが、英国で増えているレベルの高い学習者にも対応できるよう、この秋初めて「超級」学習者のための講座が開かれます。また、日本語を勉強してみようという初級の学習者も増え、夜間来られない初級学習者のために、土曜の初級コースも秋から開かれます。さらに、出張などが多く、クラスに来られない学習者には、個人コースを提供しています。各学習者のレベルやニーズに合わせてレッスンをを行うので効果的ですが、授業料は他のコースよりやや高めになっているため会社の派遣で来る学生が多いです。多様化する日本語学習者のニーズに合わせ、次々と新しいクラスができています。

そして日本語教師養成講座ですが、ステージ1の基礎コースとステージ2の経験者向き週2回の昼間のコースで、英国に増えている日本語教育資格取得希望者に対応して11年前に開講されました。学生はロンドン在住の日本人の他に、英語学校を兼ねて日本から留学する人たちも増えています。大学もしくは短大卒業の者のみが入学できるようになっており、優秀な卒業生は代々ランゲージ・センターの教師として活躍してきました。

最後となりましたが、ランゲージ・センター日本語部門では「新日本語の基礎」と「みんなの日本語」を初級学習者用に使い続けてきました。副教材などが豊富に揃っており、教師に使い易くできている教材として私達は大変高く評価しています。特に「みんなの日本語」は、技術用語が減り、ドリル以外の練習問題もでき、大変役に立っています。「みんなの日本語」用の漢字ワークブックの出版を教師一同心待ちにしております。



『日本語初中級』は、初級文法を終えた学生が基本的な文法を構造として理解し、運用力をつけるために書かれたテキストです。このテキストの授業での使い方はいくつか考えられますが、専修大学での初中級レベルのコースデザインとともにこのテキストの使用例をご紹介しますことで、コース作りの際の参考になればと思います。2回連載でご紹介しますが、初回はこのテキストのカリキュラムの中での位置づけを理解していただくために、専修大学における集中日本語コースの概要をご説明します。

1. 専修大学における集中日本語コース

専修大学国際交流センターでは、協定校を中心とした留学生を対象に集中日本語コースを一年に4期（春、夏、秋、冬）開講しています。学生の中には継続を希望する人や1年間在籍する学部の特待生も含まれていますが、大半の学生が学期終了後帰国する短期コースですので、学期ごとに学生が入れかわります。週20時間、コース全体で140～240時間です。全体の時間数に幅があるのは、春期は8週間、夏季は7週間、秋季は12週間、冬季は9週間と、コース期間が違うためです。

国籍はアメリカ、フランス、台湾、オーストラリアなど期によって内訳が異なり、毎学期、漢字圏、非漢字圏を含む約15カ国ほどの学生が参加しています。このようなコースで難しいのは、学生たちが学習ストラテジー、既習内容などについて異なるバックグラウンドを持って来日するという点です。様々な学習背景を持つ学生を包括でき、かつ力が伸ばせるような短期コースのための内容が期待されるわけです。特に、ここでとりあげる初中級レベルはこういった観点からみた難しさを孕んでいると言えるでしょう。（協定校からの学生は、このコースの単位が各所属大学の単位として認められることから、評価システムは学生にも納得がいくようにすべてオープンにしています。）

コースは、入門から上級まで7レベルでクラスを編成していますが、コース終了後もなんらかの形で学習を継続することを前提とし、基礎を大切に4技能をバランスよく伸ばすことを基本方針にしています。中級以上はトピック演習を基軸に据えたコースデザインとなっており、センターの講師陣が作成したオリジナル・テキストを主教材として使用しています。一方、初級レベルでは基礎文法の理解とその運用の重要性を考慮して『みんなの日本語』をテキストとして使用し、ストラクチャー・シラバスによる授業を行っています。初中級レベルは、ちょうどその中間に位置する移行段階のレベルとして位置づけられます。（7頁の表を参照してください。）

レベルによってクラスの授業内容が違いますが、どのレベルでも期末には日本語でのプレゼンテーションという課題が与えられています。コースの最後に仕上げとして、入門から上級までのすべての学生がそれぞれのレベルにあった内容で各自テーマを決め、それについて調査を行い、日本語で発表を行います。伝達、主張という目的をもって日本語を使用することで運用力を総合的に高めることと、プロジェクトワークを完了したという達成感を持たせることがねらいです。

| クラス | レベル | 内容 | テキスト |
|-----|-----|---------------------------|--------------------------|
| J1A | 入門 | ストラクチャー・シラバス | みんなの日本語初級、自主作成副教材 |
| J1B | 初級 | ストラクチャー・シラバス | みんなの日本語初級、自主作成副教材 |
| J1C | 初級 | ストラクチャー・シラバス | みんなの日本語初級、自主作成副教材 |
| J2 | 初中級 | ストラクチャー・シラバス トピック・シラバス | オリジナル教材、日本語初中級 |
| J3 | 中級 | トピック・シラバス | オリジナル教材、(学生に合わせて下記市販副教材) |
| J4 | 中上級 | トピック・シラバス | オリジナル教材、(学生に合わせて下記市販副教材) |
| J5 | 上級 | トピック・シラバス | オリジナル教材、(学生に合わせて下記市販副教材) |

主な市販副教材 『日本語運用力養成問題集』凡人社 『「生きる」我が友 本田宗一郎』NHKソフトウェア
『なめらか日本語会話』アルク 『研究発表の方法』産能短大国際交流センター など

| 9:00 | 10:00 | 11:30 |
|--|--|---|
| 13:00 | | |
| ルーティン・ワーク *ディクテーション *漢字 *ショートスピーチ | 主シラバス ストラクチャー・シラバス *基礎文法の復習および その応用会話練習 | トピック・シラバス (現代日本語) *テキストの精読(記事、エッセイなど、 J2レベルに合わせて書き直したもの) *タスク(調査および発表、レポート作成、 スキット作成など) |

2. 初中級レベルの特徴

それでは、初中級とはどのような特徴があるのでしょうか。このレベルに該当する学習者は、自国の大学で1年半～2年間、日本語のクラスを履修してきた学生が一般的で、たいていの場合「次の段階に行きたい。はやくハードルを越えたい」という気持ちを持っています。具体的には、初級段階の文法は一応終了し中級レベルの難度のテキストを読み始めている学生が多いと言えるでしょう。

しかし、文法については知識としてあるのみで、しかもそれが自国語に置き換えた理解にとどまっていることが多く運用は不十分なレベルです。つまり、トピックを扱うには日本語力が不足していながら、もう初級から脱却したいという多少焦りに似た気持ちを持っているため、文法の練習を単なる繰り返しにとらえ、極端な場合はプライドを傷付けられたと感じてしまうこともあります。かといって文法を軽視することはできません。むしろ中級以降に向けて日本語の構造をしっかりと理解して土台

を築く大切な時期と言えます。そしてそれは、初級で一通り習ったこのレベルだからこそできることです。

このような学生にいかにして停滞感を持たせずに運用力を身につけさせ、なめらかな会話へ導くかというのは、初中級レベルの学生を教える教師にとって頭を痛めるところでしょう。ひとつのシラバスを中心に、文法、語彙、表現などを周辺に組み立てるのも一案ですが、専修大学の初中級レベル(J2)では、先に述べたようにシラバスを二本立て、可能な範囲で関連を持たせて授業を行っています。つまり、構造のより深い理解と会話場面での運用力を養成するストラクチャー・シラバスと、知的向上心を満足させながら総合力を高めるトピック・シラバスを同等の比重の二本柱にしたコースデザインです。

今回は、初中級レベルの具体的な授業内容についてご説明いたします。

日本語初中級 テキスト 練習問題 カセットテープ 理解から発話へ 名古屋YWCA教材作成グループ著
B5判 本文・語彙220頁 解答・留意点35頁 定価(本体1,942円+税)
B5判 本文80頁 解答12頁 定価(本体1,000円+税)
90分×2巻 定価(本体3,000円+税)

教材紹介

『みんなの日本語初級 標準問題集』

待望の副教材刊行

『韓国語レッスン 初級』

文型積み上げで学ぶテキスト

スリーエーネットワーク編集部



『みんなの日本語初級 標準問題集』は、『みんなの日本語初級』各課に沿って、その課の学習事項の確認、整理、定着を図るための基礎的練習問題集です。各課の問題はその課の学習の総仕上げとして、教室で、あるいは宿題として利用することにより、学習者の練習量を増やすとともに、

各自が自分の達成度を測ることができるように作られています。

また、1課ずつ切り取って提出できるようミシン目入りになっていますので、教師が回収してチェックすることにより、学習者の習得状況を把握し、必要に応じて復習の時間を設けたり、個別指導をするなど、日々の学習活動の充実に役立てていただけるよう配慮されています。

各課の2ページの問題のほかに、復習として使えるまとめの問題を入れました(1~8課、9~17課、18~25課、1~25課、各4ページ)。まとめの問題はテストとしてもお使いいただけるよう100点満点で配点されています。

本書に続いて『みんなの日本語初級 標準問題集』が11月に刊行される予定です。

みんなの日本語初級 標準問題集

スリーエーネットワーク編著

B5判 70頁 定価(本体900円+税)



NHKテレビ・ラジオ「ハングル講座」でもおなじみの金東漢・張銀英、両先生が今までの経験を生かして完成した全く新しい韓国語の入門テキストです。本書は『みんなの日本語』と同じように文型を積み上げながら韓国語を学んでいきます。

第1部ではハングルと発音を学びます。英語学習にアルファベットは欠かせませんが、韓国語もハングルと発音は大切です。

第2部では韓国語の基本文型を勉強します。会話の場面は「あいさつ」「道をきく」「電話で約束する」など機能的になっています。

テキスト1冊を30時間から40時間で終えるのが目安となります。また、別売のカセットテープで正確な発音と抑揚を学び、普通の韓国語の速さに慣れることができます。

日本語教師のみなさんも、このテキストで学習者の母語を学んでみてはいかがでしょうか。日本語を教える上でも役立つはずです。

なお、『韓国語レッスン 初級』も引き続いて刊行予定です。

韓国語レッスン 初級

金東漢・張銀英 著

B5判 170頁 定価(本体2,400円+税)

韓国語レッスン 初級 カセットテープ

90分×2巻 定価(本体3,200円+税)

Ja-Net ジェネット (季刊) 10号

皆様からの投稿や各コラムへのご質問、ご意見等をお待ちしております。採用させていただいた方にはオリジナルテレフォンカードを差し上げます。

このニュースレターをご希望の方は、お名前、ご住所、所属をファックス等で編集室までお知らせ下さい。毎号無料でお届けします。

『Ja-Net』第11号は1999年10月25日発行予定です。

1999年7月25日発行

発行人 小川巖

発行所 (株)スリーエーネットワーク

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-6-3 松栄ビル

Ja-Net編集室 電話 03-3292-6410 FAX 03-3292-6197

営業課 電話 03-3292-5751 FAX 03-3292-5754

http://www.at-m.or.jp/~3ac E-mail 3ac@mail.at-m.or.jp

印刷 日本印刷(株)

© 1999 by 3A Corporation Printed in Japan (禁無断転載)

本誌は再生紙を使用しています。